

定立無之分」

十二帖定」

有之一統相頼相立

向島

「もんどり

新株源左衛門分家

「一古株一統江段々相頼二付

利兵衛（印）

拾式帖定

平戸町

格別之勘弁之上外二式帖増、都合拾四帖下相定」

定立巻ケ所」

三右衛門（印）

（付箋）

「一古株一統江段々相頼二付格別之勘弁之上外二式帖増、都合拾四帖二相定」

（付箋）

「明治六年酉五月改 一此度増之處、段々仲ケ間へ 右仲ケ間明治元年辰年御一新二付、段々漁師仲ケ間出役御苦勞二相成格別之骨折之事、依之式挺増、別役川付」

「明治六年酉五月改 一此度増之處、段々仲ケ間へ 頼出候二付、一統承知之上巻挺増 定立有之分」

大池表二而下木もんどり漬

彈正町

不相成働斗株

平四郎

「もんどり

中古株八郎兵衛分家

拾二帖定

新株平四郎株買請

右訳元来平四郎事中古株八郎兵衛分家二候得共、同人倅とも奉公人とも不相分、分家之儀一統不承知二候處、段々相頼、為振舞金三両差出新株相立候後、其株売払又々加入頼出候二付、働斗株二相立候事

定立巻ケ所」

向島

孫右衛門（印）

「一古株一統江段々相頼二付格別之勘弁之上外二式帖増、都合拾四帖

相定

（付箋）

「明治六年酉五月改

一此度鯨増之處、段々仲ケ間へ頼出候二付、一統承知之上巻挺増 定立有之分」

「もんどり

中株利兵衛跡中絶相成

## 近世・近代の地誌にみる巨椋池

これまで翻刻刊行された宇治関係記事を含む地誌のうち、当館が調査・収集を終えているものについて、巨椋池に関する部分を紹介する。直接巨椋池に関するもののほか、小倉・伊勢田といった地域の巨椋池沿岸諸村に関する記事も含めた。また、榎島については池に関する記述がある場合のみ掲載している。

各史料は、

番号 出典 刊行あるいは著述年

著者／掲載書

本文

の順に掲げた。へ内は原文では割注、( )内は本書編集上の注記である。本文は、関係記事のみ抽出したため、実際の掲載順と異なる場合がある。

一 洛陽名所集 万治元年（一六五八）刊

山本泰順／新修京都叢書一 光彩社 昭和四二年

（卷之六）

榎島

○此所は宇治の西なり

四十年已前までは、はなれし島なりしが、今は堤をつきて宇治の里つづきなり、もとよりこの島には布をさらし侍りぬ、藤宴兼うたに、隈もなき月の光をひるかとして布やさらせるまきの島人

巨椋

○此所は伏見より一里の南のかたなり

古歌に、巨椋入江ひびくなりけり射目人の伏見の田井に雁わたるらん、此歌のおくに巨椋は宇治におぐらと云所有、いめ人とは、ゆめ人にいへり、さていめ人のふし見、とはつづけたりと釈せり

二 東海道名所記 万治三年（一六六〇）著

浅井了意／東洋文庫三六一 東海道名所記二 平凡社 一九七九年

横落の町に左の方に行道有、竹田通に出てふしみにいたる、此春ばかりすみ染にさけとよめる墨染の桜を見て、左の方にゆけば豊後橋にいたり、又ハ木幡にゆく、大和海道也  
橋を渡り小倉堤を過て左にゆけば宇治にいたる

三 扶桑京華誌 寛文五年（一六六五）著

松野元敬／新修京都叢書二 光彩社 昭和四二年刊

(卷之一 川沢の項)

○巨椋入江 在り伏見与宇治之間

(卷之三 古蹟の項)

○伊勢田神社三坐

○巨椋神社

四 日次紀事 延宝四年(一六七六) 著

黒川道祐／新修京都叢書二 光彩社 昭和四二年刊

(九月七日) △宇治伊勢田村祭

(九月八日) △能巨椋祭 巨椋或作小倉、宇治近隣也

(九月九日) △泰真(安田の誤りか) 村 宇治近隣也

(十二月) ●此月伏見里人以柴漬取雜唯魚、凡柴漬法生薪連枝葉伐之、三四尺余河水淺処積之高之水面徑過四五尺、寒氣嚴、則雖止水、亦凝於茲諸魚聚薪下、於茲張網於柴四方撤此柴魚驚是入網、又以趕網執之、立春以後水漸暖、故諸魚不聚於茲止矣、江湖伊佐佐亦節也

五 出来齋京土産 延宝五年(一六七七) 刊

出来齋／新修京都叢書四 光彩社 昭和四二年刊

(卷之七)

○槇島

平等院を立出で茶師の家々見めぐりつつ北の方を見れば槇島なり、むかしは宇治の川島なりけるを、今は堤つき新田開作し、伏見より宇治まで地つづきに、豊後橋の南のつめより右にゆくは大和開道、小倉堤に出て玉水にいたる、左に行ば新田堤、沢田川を弓手に見て

槇島にいたり、地つづきに宇治に入なり、この槇島は布さらす名所として宇治の川水に春すすきあらひて日にさらす、その白くなる事は雪にもやとぞおほゆる、藤原宴兼が歌に

隈もなき月の光をひるかとて 布やさらせる槇の島人

布さらすうちの川波詠れは よそにはしらぬ雪ぞ降ける でき齋

○巨椋

宇治の町を西に出ればをぐら堤、小倉の里あり、ふし見よりは一里ばかり南のかたにあたり、小倉堤をゆけば大和路にて、末は井手の玉水・木津の渡りにつづけり、ある歌に

をくら入江ひひく成けりいめ人の ふしみの田井に雁わたるらんとよめり、でき齋房

日は暮て道もおくらの入江には ひひきそわたるくらかりのこえとよみてそろそろ伏見の京橋に出て、舟かりつつ打のり大阪をさして下りぬ

六 大和めぐり 延宝六年(一六七八) 刊

著者未詳／「大和めぐり」(岩瀬文庫本)の解題と翻刻 広吉寿彦

彦↓『紀要 二七』 奈良文化短期大学 平成八年

あしびきのやまとくだりをせん人は、みちあん内にてえきぞなし、いざややまとを、みやこ人にめいしよゆらいをかたらむと、そこはかとなくかき付る、まづは五でうのはしよりも伏見どおりと心ざし、▲東ふく寺迄十三町、此東福寺と申するは、正一こくしのかいきなり、いなりの山も見えわたる、此所まで十一町、▲いなりの内も八町有、此やしるハリう神也、これより▲ふしミぶんごばし(豊後橋)

まで五でうのはしより二里ぞかし、▲こわた(木幡)の里は東にて、おぐらづつみ(小倉堤)ははるばると、西にあたりてよど(淀)のしろ、ふりさけ見ればやわた山やまざきあたりも見えわたる、東になにあふうぢ(宇治)の里、むかひにたかきがらんにて、きん代めいそういんげん(隠元)ちゆんで、めてにはさわひろく水とりおおくあつまりて、ぢやうせつほつしがえいぜしも、冬の夜のさむけき月にかす見えて伏見のさわにわたる水とり、▲小倉の茶やまで一里半、▲おおかめ茶屋迄一里也、くせの茶屋迄半道、▲長池迄半道、おびのわたりといふ所ハ玉水より十町ほと北にはし有、此所ニ子すてしばといふ所有、道よりハ西也、しさいは長くていわぬ也

七 京師巡覽集 延宝七年(一六七九)刊

僧丈愚/新修京都叢書四 光彩社 昭和四二年

(卷之八)

○巨椋入江

今オグラト云所ナリ、オグラ堤トモイヘリ、則在家アリ、宇治河ヨリ南ミ久世郡ナレバ神名帳ニモ久世郡巨椋ノ神社トカケリ、勅選名所集ニ宇治郡トアリ、イカカ、為尹ノ歌ニ、オホクラノ入江ノ月ノ跡ニ又ヒカリノコシテ蛸トブナリ、又古歌ニ、巨椋入江ヒビクナリケリ射目人ノ伏見ガ田井ニ雁ワタルラシ(後略)

八 菟芸泥赴 貞享元年(一六八四)刊

北村季吟/新修京都叢書五 光彩社 昭和四三年

(第四上)

○巨椋入江

久世郡の内ながら道路のたよりにまかせてかく、豊後橋よりならへゆくには左、宇治へゆくには右にあり、今をぐら堤といふは此入江の堤也、万葉集の九に

おほくらの入江とよむ也いめ人の伏見が田井に雁渡るらし

井蛙抄に大蔵とかけり、延喜式云、久世郡巨椋の神社、此神社はかの入江の堤を行尽してをぐらの里あり、そこにいます森もあり、名寄に

宇治山の紅葉の色をかとおかなおほぐら森のおほつかなきに 左近

九 京羽二重 貞享二年(一六八五)刊

孤松子/新修京都叢書六 光彩社 昭和四三年

(卷一 里の項)

○小倉里 宇治の町を西に出れば小倉堤、小倉の里あり、伏見よりは一里ばかり南の方にあたれり、小倉堤をゆけば大和路にて末は井手・玉水・木津に續り

一〇 雍州府志 貞享三年(一六八六)刊

黒川道祐/新修京都叢書三 光彩社 昭和四三年

(一 郡名門)

久世郡

・竹淵へ多加不知・奈美 那羅 水主・那紀 宇治 殖粟  
粟隈へ久里久末・富野へ止無乃・拝志 久世 羽粟

